

「最近の支援機器の傾向と開発に望むこと」

東京頸髄損傷者連絡会 越澤 孝

1. 現在の生活と福祉機器

1983年に交通事故で第4頸髄損傷による四肢麻痺になる。リハビリテーション病院、障害者施設に入居。1997年に都内で地域生活を始め、福祉サービスを中心に、支援機器は無くしてはならない生活の一部になっている。

【現在使用している支援機器】

- ・ 電動車いす
- ・ 天井走行式リフター
- ・ 浴室内リフト、シャワーキャリー
- ・ リクライニング電動ベッド
- ・ 褥瘡予防クッション、エアーマット
- ・ マウススティック？

2. 最近の支援機器の傾向

国際福祉機器展を見学していると外国製の機器が目立ってきた。以前は外国製の機器も見かけたが、リフト、電動車いす、座位保持装置など頸髄損傷者の生活に身近な機器も外国製が多くなった。

そしてタブレットやスマートフォンに付属し四肢麻痺者やマウススティックユーザーでも簡単に入力操作できるものもあり、一般向けに発売された機器でも、障害のある方にも有効な製品もある。

そしてタブレットやスマートフォンに付属し四肢麻痺者やマウススティックユーザーでも簡単に使えるものもあり、障害のある方向けでない商品が私たちの生活にマッチしている商品もある。

多くの商品が出てくるのは良いが「実際に使ってみないとわからない」など自分の障害や生活に本当に合うのか試すことの出来ないことには変わりなく、自分だけでは選択がむずかしいはことも変わらない。

3. 当事者の生の声と開発協力

機器の多様化、高性能化、小型化、低価格化には本当に目を見張るものがあり、当事者にとっても生活の質の向上に貢献している。しかし一部には、当事者の意見が反映されているのか微妙な機器もあることも確かである。

これからは個別のニーズに合致した支援機器の開発に、当事者本人の生の声は必要不可欠なものになっており、一層の当事者協力が求められる。それには当事者の福祉機器についての知識向上や開発者・エンジニアとの橋渡しが出来ると当事者エキスパートの存在も重要である。

4. 新規の開発は大切だけど

昨今の様々な技術の進歩は著しいものがありこのような先端技術を盛り込み、当事者のニーズにあった福祉機器の開発は大切なのは言うまでもない。

しかし、ユーザーが現在使い生活の一部になっている機器が突然生産中止になりアフターサービスも受けられなくなることもあり、困っているユーザーも少なくない。また販売店の担当者により機器の知識や対応、ユーザーへの接し方が大きく違い、困惑する場面も多々あった。

5. 最後に

福祉サービス、介護者、住環境、支援機器の組み合わせが大切でひとつでも欠けると生活は成り立たない。ユーザーの声、ユーザー目線、言葉では簡単だがユーザー自身も受け身でなく積極的な関わりが今まで以上に重要になる。

これからも支援機器の開発に協力し、より重度な障害を持つ仲間の為に役立つよう努力していきたい。